令和６年度　第３回インクルーシブ教育推進委員会　議事録

□開催日時：令和７年３月１４日（金）１３時５５分～１５時５５分
□開催場所：多治見市役所駅北庁舎４階　第２・３会議室
□出席者（敬称略）
・委員　：宇野宏幸 ・ 中野正大 ・ 水戸志保 ・ 藤井智子 ・ 山口政有 ・ 安田孔美 ・ 岡　英樹
藤井博士 ・ 西村あさ美 ・ 渡辺真弓 ・ 渡邉恵子 ・ 伊藤佳苗 ・ 吉川佳江
・事務局：仙石 教育長 ・ 熊﨑 副教育長 ・ 東山 教育次長 ・ 立間 教育相談室指導主事
古川 教育相談室指導主事 ・ 前村 子ども支援課総括主査 ・ 森本 福祉課主査
信嶋 保健センター保健師 ・ 長谷川 子ども支援課障害児巡回支援専門員

１　挨拶
教育長挨拶

２　今年度の取組について
（１）基本施策１～６について事務局より報告・説明
＜基本施策＞　１ 「一人一人の教育的ニーズの把握と、それに応じた指導・援助の充実」
・発達検査に関わる「後追い調査」について
２ 連続性のある「多様で柔軟な学びの場」の整備
・肢体不自由生徒の受け入れについて　・医療的ケア児の受け入れについて
・通級指導教室について　・居住地校交流の取組の推進について
３ 教職員の専門性の向上を図る研修の充実
・特別支援教育コーディネーターの専門性の向上と充実について
４ 就学先決定の仕組みと教育支援の充実
・ニーズに応える支援相談について　・保護者への情報提供について
５ 「一貫した支援の取組み」
・スマイルブック引継会について
６ 「諸機関との連携強化」
・医療、保健センター、福祉等の諸機関との連携の強化、及び支援への活用について
・発達支援センターと幼稚園・保育園との連携の強化について
・岡本医師（就学等支援委員会委員長）の学校訪問について
（２）安田委員より精華小での実践事例の報告
・学校全体でのインクルーシブ教育の理念の共有　「みんな違ってみんないい」
・お互いの違いや心の壁に気付いて、どうしたらお互いの思いを共有し、「共に」を実現できるかを一緒に考えることが大切。
（３）意見交流
中野委員　：WISC－Ｖをどのように活用しているか。WISC－Ｖは、あくまで特性を理解するための参考にすぎないので、信用し過ぎないよう、日常生活、学習やテストの結果、対人関係などと併せて総合的に評価しなくてはいけない。検査者と学校の教員とがどのように評価、検討しているか。
安田委員　：検査者から保護者、教員（担任）にフィードバックしている。保護者と教員とで検査結果を共有し、学校でできることを校内で検討して支援に生かしている。WISC－Ｖの検査結果だけでなく、日常の学習の成果物や行動観察結果と結びつけながらアセスメントを活用し、子どもの正しい理解につなげようとしている。
山口委員長：検査結果を元にしながら、施策４の「支援相談」を活用するなど、多角的に子どもを理解しようとしている。

中野委員　：発達通級指導教室のアンケート結果は大変によい。診察する子どもたちも９割は肯定的。通級に通う患者に何がよいかを尋ねると、先生の魅力、学習内容との反応が多い。アンケートでは否定的な回答はなかったか。

事務局　　：要望はあったが、否定的な意見はなかった。

中野委員　：先生と子どもとの信頼関係があれば、ほとんどのことは解決する。

～　休　　憩　～

３　実践報告

（１）南ヶ丘中学校 通級指導教室担当 成橋俊次 教諭より

・中学校ステージにおける通級指導の在り方

～一人一人の自己理解を促し、自助力を高めるために～

（２）意見交流

山口委員長：通級担当者と担任との連携はどうか。

西村委員　：（小学校の通級指導教室設置校では）通級担当者と担任とが直接顔を見て話ができるのがありがたい。双方で同じ視点で指導ができ、その都度、子どもの様子を交流できる。

成橋教諭　：本務校以外では、担任と直接話す時間はとれないので、「通級ファイル」を活用して、担任や保護者との連携に生かしたり、担任とはタブレットで報告ややりとりをしたりしている。特に、本人と担任との関係がよくなるように配慮している。

中野委員　：事例１について、ＡＤＨＤの子どもは、夜の睡眠がきちんととれているかどうか、家庭は睡眠がしっかりとれる環境にあるかが重要。睡眠が不十分だと、落ち着きのなさ、多動、衝動性、集中困難などの症状が出る。外で運動を行うようにしたことで、睡眠がしっかりとれるようになって、成果になったのではないか。事例２の「職業準備性ピラミッドの活用」は、（通級に通う子どもは）将来への認識が幼い傾向が強いので、大変すばらしい。事例３の「特別な支援を受けることに心理的抵抗がある」子に対しての対応もすばらしい。事例４の「担当者の弾力的なサポート体制」は大切で不可欠。役割分担があり協力体制のある「トライアングルの形成」も大変によい。成橋教諭の、子どもに真摯に向き合う優しい人格もすばらしい。

宇野委員　：多治見市の中で特別支援教育が充実してきた。精華小の実践では、インクルーシブ教育に向けて、みんながわかり合うことを学校で実現している。インクルーシブ教育が真の姿となるためには様々な課題があり、その解決のために、教員・保護者・関係機関がつながりながら共に取り組むことが大切。ジグソーパズルのピースがそろいはまってきた感じ。成橋教諭の実践は、通級指導教室のお手本。特に、子どもの自己理解（得意も苦手も含めた肯定的自己理解）を大切にし、セルフアドボガシー（自助力→自立）をめざしていることがすばらしい。将来のキャリアに向け、なりたい姿を大切にした指導ができている。

４　来年度に向けて

安田委員　：委員会の内容を学校に持ち帰り、学校でいかに実現できるかを考えることができた。周りがどうなったらよいかを考え続ける先に、「共に」の実現がある。今後も、インクルーシブのサイクルを回していきたい。

岡　委員　：巡回相談、支援相談で学校・園を訪問する中で、個別の特別な支援の助言を期待されるが、まずは教室でできることを一緒に考えていきたい。

藤井博委員：（専門的な知識等について）教員の中に広がってきたが、まだまだの面もある。支援を必要とする子への支援内容を考えて実践するが、うまく結果が出ないときには不安になる。そんなとき、検査結果、医療・通級担当者・巡回相談の見立て・助言などが拠りどころになり、役に立っている。

西村委員　：委員会にはいろいろな立場の委員がいて、その意見や助言が、普段の、霧の中を歩くような、試行錯誤の支援を考えるのに、安心につながったり役に立ったりした。学校でも共有したい。

渡邉委員　：小学校での授業や通級指導教室での支援の様子を知ることができた。園では、年齢も低く困り感をうまく表現できずにいる子が多いため、安心できる場を作り信頼関係を築くことが大切であることを改めて学んだ。様々な機関の助言を受けながら、一人一人に対応していきたい。

渡辺委員　：基本施策５「一貫した支援の取組」について、引継会は園にとって大変にありがたい。巡回相談も、もらった助言を保護者への働きかけの根拠にできるなど、大変にありがたい。スマイルブックは保護者が所持しているため、園や学校で日常的活用ができるようにすることが課題。成橋教諭の実践から、先生と生徒との信頼関係の大切さや、担任の先生との関係にも配慮することなどを学んだ。

吉川委員　：委員会に参加して、我が子に関する経験だけでなく、いろいろな子の困り感に対して、いろいろな立場からの様々な支援があることを知ることができ、また、その支援をよりよいものにしようとしていることも知ることができてうれしい。病院と保護者と学校などに連携や協力があることもうれしい。

伊藤委員　：今まで我が子のことしかわからなかったが、こうした温かい会議が知らないところで行われていたことを知ることができてよかった。我が子の経験と比べると、インクルーシブ教育が充実してきている。多治見市はすばらしい。障がいのある子もない子も、個別の支援ばかりでなく、全体で共に生きていくインクルーシブを今後も大切にしていきたい。

藤井智委員：東濃特別支援学校には多治見、土岐、瑞浪の３市から子どもが通っているが、そのうち６割が多治見市在住。小さいときから様々な形の支援を受けていることを知ることができた。そうした子どもたちを、支えてもらった地域や社会に送り出せるように、委員会で学んだことを学校に持ち帰り、生かしていきたい。

水戸委員　：以前、教員をしていたが、昔と比べて子どもの様子や学校の体制が変わってきたことを改めて感じた。今年から「児童発達支援センターわかば」になって、学齢期の子どもの相談が増え、学校の先生の訪問も増えた。いろいろな支援の体制やつながりが深まっていることを実感として感じる。また、（この委員会が）乳幼児期にできることは何かについて改めて考えるよい機会になった。各事業所とも共有していきたい。

中野委員　：外来に来る子どもに不登校が多いが、その背景に学習障がいがあることが多い。その子たちは、勉強しない子、努力しない子というラベルを貼られ、なぜそうなるのかについてはスルーされている。合理的配慮を学校にお願いしている。多治見市の学校はすぐに対応してもらえることが増えてきた。今後、高校の先生も含めて学習障がいの子どもたちへの支援についての啓発をお願いしたい。

山口委員長：この委員会での様々な意見を聞く中で、（インクルーシブ教育推進たじみプランのめざす）「みんなが伸びる　みんなと伸びる　自立を支援する教育の推進」の、「みんなが」には教師、保護者も含まれ、「みんなと」にはいろいろな機関の皆さんも含まれ、その中で子どもたちが伸びていくと考えて、この言葉を噛みしめるようになった。この委員会の内容を子どもたちに関わるいろいろな人に発信し、理解が得られるように推進することが大切。支援に関する最新の情報をアップデートし、子どもたちによりよい支援を与えられるようにしていきたい。

宇野委員　：多治見市インクルーシブ教育推進委員会は、これからの学校現場の姿を先取りしている。また、委員会の中で様々な関係者同士のそれぞれの立場からの対話ができ、横の連携ができるようになってきた。特別支援教育において、どういう子に育てるかをすべての先生が共有することが大切。何に価値を置くかが見失われているために不登校の子どもが増えてきた。支援を必要とする子どもが、自分なりの対処の仕方を先生と一緒に見つけることに

価値を置いて大切にしたい。発達障がいの子どもは頭の中で自分を理解しようとしても難しいので、経験の中から見つけるように、先生はその支援をするようにしたい。また、「正解に導く」ことから脱却し、「正解は一つに決まってはいないから、一緒に考えよう」という姿勢が必要。どんな子どもにとっても、学ぶことが楽しいと思える学校にしたい。特別支援教育の「特別」がとれ、すべての子のためのよりよい教育をめざすことが「特別支援教育」である。

5　挨拶

副教育長挨拶